

北区「WA（わ）のころ」創生講座 第5回「祭事の継承」

メインパーソナリティー：能楽師観世流シテ方 河村 晴久 氏

ゲスト出演者：一般財団法人賀茂県主同族会理事長 堀川 潤 氏

字幕

<河村晴久氏>

皆さんこんばんは。今日も「北区「WAのころ」創生講座－文化のWA－」をご聴講いただきましてありがとうございます。北区から「WAのころ」。ローマ字で「WA」と書いておりますけれども、平和の「和」、繋がり「輪」、そしてお話の「話」。いろんな意味で、地元から繋がって、人が繋がり、そして文化を創生していこうという講座でございます。

今日は、一般財団法人賀茂県主同族会理事長、そして、賀茂競馬保存会副会長の堀川潤様にお越しいただきましていろいろお話を伺います。堀川さん、どうぞよろしく願いいたします。

<堀川潤氏>

こちらこそよろしく願いいたします。

<河村晴久氏>

地元の上賀茂神社のお話を伺えるんですけれども、何と言っても歴史が古く、立派な神社で、そしていろんなことが伝わってきているという、すごく歴史文化のあるところですね。

<堀川潤氏>

そうですね。今日はどこまでお話ができるかわからないですが、とにかく深く広すぎて、本当に雑駁な、上辺の話しかできないかもしれませんが、できるだけ皆様にご理解いただけるようにしていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

<河村晴久氏>

まずは、賀茂別雷神社のご由緒などについてお話いただけますでしょうか。

<堀川潤氏>

ご承知のように、「上賀茂神社」と言いますが、^{かもわけいかづちじんじや}「賀茂別雷神社」というのが正式名称でございます。下鴨神社が^{かもみおやじんじや}賀茂御祖神社で、元々は一つの神社でございます。「賀茂神社」という神社で、それが上社、下社というので、分かれたわけでございますけれども、京都で最も古い、日本でもかなり古い神社です。平成27年に第42回の式年遷宮というのをやりました。これは21年ごとにやるわけでございますけれども、その前の平成6年に、「古都京都の文化財」ということで、17の社寺含めて、世界文化遺産に登録されたということでございます。

これは上賀茂神社の境内図でございます。この社殿の建っている位置が実は、ほぼ鎌倉時代の初めから全く変わっていないということで、そういう意味でも長い歴史があります。ただ、江戸時代までは神仏習合でしたので、この中にお寺が三つありました。今はそのお寺は跡形も残っておらず、その辺は少し変わっていますが、あとはほとんど変わっていない状況です。

（資料の）下にありますが、「斎王桜」という非常に綺麗な桜、皆さんもご承知だと思いますが。

<河村晴久氏>

立派ですねこの桜。すばらしい桜です。

<堀川潤氏>

そうなんです。この斎王桜の隣に「御所桜」という桜があつて、これは孝明天皇が御下賜になったという桜ですが、それから分かれた、要するに（御所桜が）古木になってきましたので、そこからとって育てたのがこの斎王桜でございます。

実は、本殿と権殿というのがあるのですが、国宝になっておりまして、これらは先ほど出ました孝明天皇が、行幸啓された 1863 年（文久 3 年）に建ったものでございます。御本殿を写すことができないので写真はありますが、ここ（スライド）に写っている御本殿前というところ、お正月はここまで入れますので、お参りをしていただけます。その時に少し見ていただくと、右正面にある本殿と、その左にある権殿と全く同じ形でございます。これは先ほど言いました式年遷宮の時などには、一旦お移りいただいてまた戻っていただくというような形になるということでございます。

境内の中に建物が 50 数棟あるのですが、その内の 41 棟とほとんどが重要文化財です。

<河村晴久氏>

41 というのはすごいことですね。みんな重要文化財。

<堀川潤氏>

建物があれもこれも、ほとんどが重要文化財でございます。ほとんどの建物は、寛永 5 年の造りでございまして、徳川秀忠、それからそのあとの家光公がお造りいただいたということでございます。

その他に、歴史的文化財という府の指定の文化財が 10 棟ございます。ほぼ建っている建物全部が文化財というふうに思っていただけだと思います。

ちょうど楼門というのが、この境内図の上の方でございますけれど、この楼門を入る手前のところに玉橋という橋があります。その橋の横に片山御子神社という神社がございます。これは母神様の玉依日賣様をお祀りしています。先ほど言いました下鴨神社、これは京都市左京区にございますけれども、この神社は御祖神社というふうに、「御」に「祖」と書きます。いわゆる、玉依日賣様とそのお父様の賀茂建角身命というこのお二人をお祀りしている神社でございます。それがこの、御祭神の家系図と失礼ながら書かせていただいたんですが。

今言いました、賀茂建角身命さん、この方はいわゆる神武東征の時に道案内をしたという八咫鳥でございます。すごく盛り上がりおりましたワールドカップサッカー日本代表マークの三本足の鳥、これが八咫鳥でございますが、この賀茂建角身命さんのお嬢様が玉依日賣。これが今の御祭神の、賀茂別雷命のお母さんでございます。

賀茂建角身命様の奥様というのが、伊賀古夜日賣と言いまして、これは丹波の方でございます。できたお子様が 2 人いらっしゃって、玉依日子と玉依日賣というお二人のお子様でございます。

玉依日子というのが、私、賀茂県主の祖先、初代ということになります。この玉依日賣様というお母様と、この火雷神という、これは角宮というちょうど京都府の乙訓ですね、今は向日市になりますが、そこにあります「元：乙訓神社（乙訓坐火雷神社）」。今は角宮神社と向日神社という二つ神社があるのでございますけれども、ここに御祭神がお祀りされていて、そしてできたお子様が、この賀茂別雷命という形になっております。

この賀茂建角身命様と玉依日賣様を下鴨神社にお祀りしてあるんですけども、実は賀茂建角身命様が、奈良からこの賀茂県主一族は移ってくるわけです。その際に一旦寄られたところが、今の久我神社という神社がありますが、ここにずっと鎮座されまして、そのお孫さんに当たる賀茂別雷命が、今の上賀茂神社の位置に鎮座されているというような形でございます。ですから、私どもの祖先で

ざいますので、この久我神社のお祭りの時には、やはり賀茂県主同族会の理事長として、一番に名前を呼んでいただいて、一番にお参りをするというような形になっています。

それと、先ほどのこの片山御子神社というところに、玉依日賣様^{たまよりひめ}、お母様がいらっしゃるのですが、この上賀茂神社のお祭りをする時に、先に祝詞をここであげるんです。そのことに少し触れますと、資料が少し先になりますけれども、神社には 70 ぐらいの…

<河村晴久氏>

70 も祭りがあるんですね。

<堀川潤氏>

はい、祭りが毎年あるんですね。それぞれのお祭りの時に、宮司は祝詞を読むわけです。祝詞を読む前に、必ず片岡社に対して、別の神職がそこで祝詞を読むんですよ。「片岡社先祭」と言いまして、お祭りをする時には、大きなお祭りは御扉を開けて、そこにいわゆる神饌を全部上げるわけですが、それから神様に祝詞を読むと。その祝詞を読む前に、別の新職がわざわざ片岡社に参って、片岡社のところに祝詞を、その時に「片岡社祝詞^{かたおかのやしろのりと}」という言葉がありまして、その言葉が終わってから、宮司は御本殿に向かって祝詞を読む。ですから、お母さんといいますか、先祖を非常に大事にするというそのような形の祭式です。

資料を少し戻らせていただきますけれども、これがですね、もう古い話ですが。

<河村晴久氏>

お生まれになった時の話ですよ。このエピソードが非常に面白いエピソードですね。

<堀川潤氏>

これは『山城国風土記』の逸文でございますけれども、この中に、「山城国風土記にいわく、可茂の社^{かもたてつぬみのみこと} 賀茂建角身命、丹波国の」…お母さんを娶ってこういう子どもができましたというようなことが後に続きます。ここに書かれているのが、「あなた（賀茂別雷命）の父親は誰ですか？」と聞いたら、「私の父親は天にあります」というようなことを言って、甕^{いらか}を破って天に昇ってしまいました、というような話がここに書かれているんです。ですから、いわゆる賀茂社の謂れ、成り立ちがここに書かれています。お手元にスライド資料をコピーしたものがありますので、ご参加の方はそれを見ていただければと思います。

先ほど言いました玉依日子^{たまよりひこ}、これが賀茂県主の祖先でございますけれども、なぜ賀茂県主というのができたかといいますと、先ほど言いました、八咫鳥の姿になって、賀茂建角身命^{かもたてつぬみのみこと}様が道案内をして天皇を助けたということで、神武天皇さんから「姓^{かばね}」、いわゆる名前をもらうんです。そこで「賀茂」という名前をいただきます。

「賀茂」というのは、「神」という言葉に通ずるというふうに言われていて、「神の分かれたもの」ということで「賀茂」という名前をもらう。ずっと私たちの先祖は、「賀茂県主」と名乗っておりまして、実は今は堀川と名乗っておりますけれども、これは「賀茂」だらけなので区別するために出てきた名前なので、ずっと後になってからでしか（文献等に）出てこないし、また養子縁組などもしっていて、私もですね、数代前は「近藤」という苗字で、「近藤と称す」と書いてあるんです。でも、その前は「藤木と称す」と書いてある。また、「堀川と称す」と、どんどん名前が変わっていつているんですね。それで（上の名前は）あまり気にしてないのですが、それよりむしろこの下の名前の方が重要なんです。

これは 16 の名前、十六流というのがあるんですけど、実は私は「経^{つね}」という、右下の方にありますが、この系統なんです。これが分かれていくんですけども、血が分かれたのがちょうど治承 3 年の頃です。

<河村晴久氏>

源平の合戦の頃ですね。

<堀川潤氏>

そうです。平家、平清盛が全盛期の時代。その時に「経」というのに分かれてくるんですけど、元々一つだったものがこういうふうに分かれてきて、それを代々継いでいくというような形になります。

これは都が遷る前の話でございますけれど、北の方には賀茂氏がいて、南の方に秦氏がいる。両方とも何が強いかというと、水なんですね。賀茂氏は鴨川の源流、要するに、元々は貴船社も全て賀茂社だったので、水を抑えてる。それから秦氏は桂川のところで水を抑えている、ということで、この二つの水を抑えているということは、すごく重要なことであるかと思うんですね。奈良の平城京がやっぱり駄目になったのは…

<河村晴久氏>

水がないですね。

<堀川潤氏>

水がないんです。大きな川がなかったため、あそこは水がなかった。それと土地が低かったので、大雨が降った時に全部水が流れ込んでしまい、疫病が流行ったというようなことがあって、水が非常に重要だと桓武天皇さんが思われて、最終的にこちら（京都）にされた。その時にやっぱり、大きな力を持っている秦氏と賀茂氏が助けたというようにして都はできている、という形になります。

これは少し後で話しますが、どんどんと神社の形態が変わってくるという話です。初めは賀茂氏の氏神様で、単に自分たちが祀っていた神様というのが、都が来てから都の守り神になって、勅祭社になって、征夷大將軍がお参りするようになって、国家祭祀するようになってと、どんどん…

<河村晴久氏>

どんどん国の中心の神社になっていくんですね。

<堀川潤氏>

そうなんです。国中心の神社にどんどん変わっていったんです。それをずっと歴代の賀茂氏が守ってきたわけですが、先ほど言いましたように、元々一つの神社だったのが、なぜ上と下に分かれたのかと言ったら、これはやはり、力が強すぎたんでしょうね。力が強いのが、嫌がったことだと思うんですけど。

実は歴史の中で、一番初めにこの賀茂社の名前といいますか、賀茂祭の話が出てくるのが、698 年の文武 2 年の時で、これも『釈日本紀』の中に出てくるんですけども。人が集まり過ぎたから、祭の見物客を規制するわけです。かなり制限いたしまして、祭を見に来るな、というようなことを言うわけです。それほどにやっぱり賑やかで、600 年代ですからまだ都が来ていない時代ですが、山城の国でそういう大きな祭りがあるんだということは、平城京には伝わっているわけでございます。

ここにありますが、この（資料の）上のこれがですね、実は今見れるんです。これは重要文化財で、普段は年に 1 回しか出さないんですけども、京都産業大学のギャラリーというのが丹波口の駅の近

く、京都産業大学の中学高校がある建物の横にありまして、そこで来週の日曜日まで、(来年 2023 年の) 賀茂競馬 930 年を記念して、「上賀茂神社と賀茂競馬」展というのをやっております(展示は既に終了しています)。その中で、なかなか出さないこの重要文化財を出しております。だから実際のものを、今であれば見ていただける。

我々はこの(資料右下の)、社家町というところにずっと居たんですね。住んでいたのですけれども、今は住んでいないんですね。住めないんです。その話は後でしますけれど、というようなことで、上賀茂神社というのは出来てきた。次に上賀茂神社のお祭りの話に移りますが、現在、年間に 70 ぐらいのお祭りがあります。

<河村晴久氏>

この数がすごいですね。

<堀川潤氏>

もっと小さいお祭りもあるんですけども、毎日のお祭りは当然されていて、その他に月次祭^{つきなみさい}というお祭りがあるんです。その他に、大祭、中祭、小祭と。「勅祭」というのが「賀茂祭」、勅使さんがメインのお祭なので、いわゆる賀茂祭というのは、皆さんは「葵祭」という名前でご存知だと思いますが、それがありまして、大祭というのが、土解祭^{どげさい}という 4 月 3 日にやるのと、競馬会^{けいばえ}という、これが 5 月 5 日の賀茂競馬です。それから新嘗祭が 11 月 23 日。この三つが大祭なんです。これは上賀茂神社の不思議な点ですが、土解祭と新嘗祭は五穀豊穰のお祭りなんですね。先ほど言いましたように、鴨川の水を利用して土地の開墾を賀茂族は行っていました。それで、実りがするようにというこの土解祭。土が解ける頃、今年の稲作はどの粃^{ぼくじょう}を植えたらいいのかというのを陰陽師が選んで、これにしましょうと決める、というようなことを卜定する。卜定によって決めるというお祭りが土解祭です。

それで今度は、実りましたと言ってお祭りをするのが新嘗祭。新嘗祭の他に、全国でここしかやっていない相嘗祭という祭りもある。本当は 71 の神社でやっていたのが、今は上賀茂神社でしかやっていない相嘗祭という祭りを、これは 10 月に伊勢神宮のお祭りに合わせてやるんですけど、この二つはいわゆる五穀豊穰のお祭りなんです。大祭の中で競馬会だけ違うんです。これもいわば、神様に馬が走ることを見せるわけですけども、これだけが少し違うお祭りなんです。

(この資料が) 先ほど言いました、非常に有名な例祭の賀茂祭、勅祭でございます。それで、こちらが双葉葵。この双葉葵を、必ず神社のあらゆるところ、お祭りに出る人みんなもそうですけれども、資料を見ていただいたら皆(身なりの) こういうところに葵と鬘^{かつら}を付けるんですけども。神社の中も全部飾る。これは先ほど言いました『釈日本紀』に出てくる賀茂の社で、こういうことをしたら日本の国が鎮まりますという話からきています。

それで、御神紋が二葉葵ということで、先ほど、今の社殿は全部、徳川時代に作られたという話をしましたが、徳川がすごい力を入れてですね、御社殿を守ったり、新しく作り変えたり、それから参詣されたりと、これはやっぱり神紋と社紋の関係があるんです。徳川家の家紋は三つ葉葵ですけど、言われているのは、徳川家康は実は 1601 年に賀茂社に来られているんです。家康は、松平が三河の国の賀茂神社の、いわゆる氏子だという関係で、これを自分の家紋にされるんです。だから、親藩以外は使ってはいけない家紋ということになるんですけど。実は 1 人だけずっと使っていた武将がいるんですけど、ご存知ですか。

<河村晴久氏>

いやあ、誰でしょう。

<堀川潤氏>

家康一番の家来と言いますと、ずっと家康と共に歩んできた人がいますね。どうしてその人だけが家紋を使えたかという、それは後で話をさせていただきます。賀茂神社のもともとの神職であったということからですね、ずっと使われるんですけども。後でその話はいたします。

<河村晴久氏>

神職から家来になったということですか。

<堀川潤氏>

そうです。

先ほど言いました葵祭の話でございますが、この資料は『山城国風土記』なわけですけど、『本朝月令』という、これはいわゆる『釈日本記』を詳しく書いた鎌倉時代のものですが、この中に祭りの話が少し出てきます。「いろせ、玉依日子^{たまよりひこ}」というのが、「賀茂県主が遠き祖なり」と。「其の祭りの日に、馬に乗ることは」とは、賀茂県主が馬に乗って走ることは、ということなんですね。志貴島の宮というのは、これは欽明天皇が宮を営んだという、奈良県桜井市のあたりの話でございますが、その時に世の中がすごく荒れていた。そこで占わせたところ、実はこれは賀茂の神様が崇めている、怒っていらっしゃるから鎮めなさいと。そこでどうやって鎮めたらいいかと言ったら、馬に鈴をかけて、人は猪頭^{いのがしら}を被りと書いてあるんですけど、馬を走らせろと。馬を走らせたら、五穀豊穡になって、天下泰平になりますというようなことで、実際にやったら、世の中が鎮まりましたということで、馬に乗ることはここに始まりましたというふうに書かれているんですね。これが、葵祭の一番最後に、「走馬の儀」といって勅使さんの前で馬を走らせるのですが、その話でございます。

実は、賀茂県主だけでやる祭りがまた別にあるんですけども、葵祭と違ってこれは人に見せない祭りなんです。山駈と言って、山の中を馬を走らせる。まさに神山に向かって馬を走らせるということをやるんです。

<河村晴久氏>

神山というと、あの京都産業大学の北側にあるところですね。

<堀川潤氏>

そうです。いわゆる神降ろしをする時の、御生所^{みあれところ}のところで馬を走らせます。これは人に見せません。このようなお祭りもあります。だから実際にこうやって馬を走らせるということが、賀茂祭の初めになっているということと、競馬に実は繋がっていくという話です。

神社のお祭りの話に戻りますが、21年ごとに式年遷宮をやります。1036年から始まって、21年ごとというのは、伊勢神宮の遷宮は20年ごとなので、その伊勢と同じことをしてはやはり憚りがあるだろうということで、1年ずらしたんです。それで21年ごとにやっているということでございます。式年遷宮の話だけで30分ぐらいかかるのでやめますけれども。

それで、このあたりからは不思議な話になっていくんですけど、陰陽道というのはご存知ですよね。

有名なのは清明神社で、「陰陽師」という映画にもなりましたが、この陰陽師の安倍晴明をお祀りしてあるのが清明神社です。この陰陽思想というのは、平安時代にすごく流行るんですけど、室町時代に衰退するんですよね。衰退するのに、なぜか上賀茂神社では今でも、陰陽道がかなり残っているんです。祭式にもそうですし、神社の中の設えのところ。一番わかりやすいのが、この細殿とい

うところの前にあるこの立砂。上賀茂社に行かれたことがある方はわかると思いますけど、二ノ鳥居の中に入っていったら、ちょうど正面の辺りに立砂があります。これはいわゆる陰と陽の関係です。この上のところに、三つ葉の松、片方には二葉の松。三葉の松と二葉の松が上に刺さっているんです。これが陰と陽の関係、表と裏の関係ですね。こういう陰陽道の名残というのはここにもあるし、それから、重要なお祭りをする時には、神職以下は土舎^{つちのや}でお祓いをするんですけど、そのお祓いをする時に使うのが、この祓串というもの。写真でこちらの人が持っているのがわかりますかね。こういう細い棒みたいなものなんです。これを祓串というのですが、これで先生が先ほど仰った、「左、右、左」なんですけど、「左、右、中」とやって、ふっと息を吹きかけて、3分の1ぐらいをぽきっと折って川に流すんですね。神職がお祭りをする時に、土舎^{つちのや}で自分で自分を祓って、それを陰陽代というものがまた集めて、やっぱり川に流すんですよ。ということで、自己祓ということをするんです。普通の神社は大体、幣を払って行いますが、こういうお祓いではなくて、基本はこの祓串で払う。これもすごく不思議なことです。

それからここにありますが、この人形^{ひとがた}というんですが。ここに名前を書いて穢れを祓うというのが、6月30日の夏越の祓、それから12月31日の大祓の時にやりますけれど、これも全部川に流します。いわゆる雛祭りの元で、もともとは流し雛なんですね。この人形というのに、自分の穢れを移して、清らかな体にするということを今でもやります。

ここから、上賀茂神社に移された賀茂競馬の話に移りますが、この競馬が、先ほど言いました大祭三つのうち、競馬の祭だけ少し違うという話をしたと思うんですが、これは自然発生的に神社の中で起こった祭りではなくて、寛治7年の1093年に、昔宮中の武徳殿の前で行われていたお祭りを、上賀茂神社に移すわけです。移した謂れとして、天下泰平を願って移すんですけど、(宮中の女御達が左右に分かれて)菖蒲の根合わせというのをやって、その左方と右方が競って、左方チームが勝ったら上賀茂神社に奉納します(移します)。右方がもし勝ったら、岩清水に奉納します(移します)と。実際に、左方も右方も一回ずつ奉納しているんですが。

<河村晴久氏>

左と右とそれぞれに。

<堀川潤氏>

両方とも奉納しているんです。しているんですけど、岩清水には残らず上賀茂だけが残って、ずっとやっている。これは(外から)持ってきた祭りなんですけど、私がずっと不思議に思っていたのが、大きな大祭の中でこれだけを(外から)持ってきて、宮中の方から移ってきたのですが、なぜこの時代に移ったんだろうというふうに思っていたんです。それも、いわゆる岩清水というのは、やはり秦氏の影響が当然強く残っていますし、それから京都でいうところの裏鬼門の位置、南西の方角になりますけれども、そちらに持っていわずにどうして上賀茂に持ってきたんだろうと。ただ単に、女御の菖蒲の根合わせの勝負で決まったことで、本当にそうなのか。というふうにずっと考えると、ちょうどこの時期というのは、もう平安時代の終わりの時期でございますね、1093年というのは。もう武士が台頭している。この頃、ちょうど平家がすごく強くなっている時期でもあるんですが、上賀茂神社で言うと、この時には、天皇のいわゆる娘さん、皇女がご奉仕なさっているという齋院というのがあって、伊勢にあるのと同じものが、上賀茂にもあったんですね。

<河村晴久氏>

紫野ですね。

<堀川潤氏>

そうです。上京区のところに、櫟谷七野神社というところに跡地がありますけれども、そういうのがあった時期。それから先ほど言った式年遷宮が、後一条天皇の命によってやり始めたことでもあり、その前には、社格的に、伊勢に次ぐ社格だという、注視に属するというふうに言われているということで、ある意味、上賀茂神社絶頂期のような時代です。その時に、今まで武徳殿の前で行っていたことを上賀茂神社に奉納しようというのは、この時期的に考えると、それを絶やさずに上賀茂でやってくださいということだったと思うんです。それがずっと残ってくるわけですけど、このようにいろんな方が見物に来て、庇護を受けてやっていくんですが、他の祭りというのは大体ですね、応仁の乱で一旦衰退したらなかなか戻ってこないんですね。でも、応仁の乱のために中止になっていても、賀茂競馬は4年か5年で戻ってるんです。

<河村晴久氏>

それはすごいですね。復活できるというのは。

<堀川潤氏>

元弘の変の時の1333年、3年だけ中止になってまた戻っているんです。というようなことで、競馬というのは競い馬ですから、やっぱり武士にとってもこういう馬を競うということは、すごく重要なことだったのかもしれないんですけど。どうして度々中止になったことが復活してくるかというのが、これもまた、我々が継承していますけど不思議で、わからないところなんです。

<河村晴久氏>

しかし、1333年の元弘の変にしても、この時期は政権が変わって大混乱が起こるところですよ。それでもすぐに戻っていると。

<堀川潤氏>

ただ、鎌倉幕府ほど室町幕府は熱心ではなかった。というのは、20の庄園があるんですけども、その20の庄園は、もともとは源頼朝が寄進された庄園というのがもとにあるんですよ。

織田信長は賀茂競馬を2回ご覧になられて、その内の1回は自分の馬を20頭持ってきて、これに乗れ、というようなことで。これは信長公がそういうことをされたというのが神社の記録にちゃんと残っています。実は、明智光秀に織田信長が本能寺で倒されるんですけども、この本能寺の変の明くる日に本当は、上賀茂神社に参拝に来る予定だったんです。参拝に来る予定で、どういうふうにして織田信長公を接待するのかという、こういうお料理を出すというのも、全部書いたものが記録にあるんです。お見えになる予定が倒されて、お見えにならなかったわけです。ということもあってですね、時の政権が、それぞれすごい力を入れていただいた。徳川の時代になっても変わらずに、徳川綱吉のお母さんの桂昌院は、この馬具を10対、左右10組ずつの20の馬具一式を寄進されておりまして、この馬具は残っております。

<河村晴久氏>

そのままあるんですか。

<堀川潤氏>

実は私は、30数年前まで乗厩もしておりましたけれど、乗厩というのは騎手のことで、馬に乗る騎手のことを乗厩というんですが、私がやっていた頃にこの鞍を本番では使っていたんです。

<河村晴久氏>

これを、使い続けてられたんですか。

<堀川潤氏>

今は傷みが激しくて、危険なのでもう使っていませんが、この鐙は現存しています。使えます。これも今、展示しています。

先ほど言いました、庄園が 20 カ所あって、この庄園の代表が、競馬ではそれぞれ走るわけですが、このもとを築かれたのが、先ほど言いました源頼朝が上賀茂神社に 20 の領地を寄進されたのが一番基本になっています。領地は少しずつ変わっているんですけども、今でもこのそれぞれのところには、賀茂神社がほとんどあります。

<河村晴久氏>

そうですか。

<堀川潤氏>

残っていますね。名前が変わっているところもありますけれども。

この中の①と書いてある、この美作国倭文庄みまさかのくにしとりのしょうというのと、②と書いてある、加賀国金津庄かなづのしょうというこの二つが、重要な馬なんです。なぜか、この①の美作国倭文庄という方が絶対勝つんです。

<河村晴久氏>

勝つ方が決まっているのですね。

<堀川潤氏>

儀式で決まっています絶対勝つんです。それで、この加賀国金津庄というところ、もともとはここの代表で出てきているんですが、絶対負けるんですよ。絶対の負け馬なんです。この二つが有名です。後で追々言いますけど。この 20 の庄園の分布図は、お越しの方にはお手元の資料にもありますので、こういうところが代表で出ていたんだなというふうに見ていただいたらいいと思います。ほとんどのところには賀茂神社というのが今でも残っております。

これは和鞍という、馬装ですね。皆さんが、例えば観光地で乗馬されたり、乗馬クラブで乗られたり、それから競馬の時、競馬の時の馬装は少し違うんですけど、ほとんどはこういうものとは違う、洋鞍という馬装でございます。これは和鞍という馬装。乗り方も全く違います。今日はその時に使う鞭を持ってきているんですが、これ、竹でできている竹鞭なんです。これが、馬に乗る時、走る時に使う鞭です。洋鞍の鞭は大体革でできています。ステッキっていうんですけどね。これは竹でできているんです。すごくしなるんですけど。実際には、走る距離が短いのであんまり鞭を使うことはないんですが、走る時に鞭をバーンと入れて走っているように見せていますけど、実際にはあまり叩かないです。叩いてしまうと、今使っている馬はほとんど元競馬とかで走っていた馬が多いので、鞭を思い切り入れたらどこまで走っていくかわからないので。でも、実際に勝負ですから、多少は鞭を入れることもありますけれども。いかに勝負しているかという（風に見せる）ためにこう・・・

<河村晴久氏>

お写真を見ると、何かすごく打っているように見えますけどね。

<堀川潤氏>

打っているみたいですけども、思いっきり叩かずに入れる形で。でも馬を走らす時には、一番初めは、お尻叩くより首のところにパチンと鞭を一発入れた方がよく走るんです。このようなすごく古

い馬装を使うことになります。

競馬と一概に言いますが、パートが幾つか分かれていまして、この5月1日にあるのが、これは「さんずいへん」に「太い」と書いて足汰（あしぞろえ）と読むんですけど、この足汰式というのがパートワンでございます。簡単に言うと、先ほど言いました20の庄園の代表で出てきた人が、5月5日の本番に向けて走る、公開予選会みたいに思っていたらいいんですけども。走る組み合わせの順番を決めるのですが、単に順番を決めるだけではなく、乗っている人の姿勢や所作、それから馬の速さや年齢、それら全部を加味して判断し、どれとどれの馬を組み合わせたらいい勝負ができるのかというふうなことを決めるのが、5月1日の足汰式という式でございます。

これはお祓いの様子ですが、ここでまた、祓串でお祓いしているんですね。この（左側でお祓いを）やっている役の人が、先ほど言いました美作国倭文庄みまさかのくに しどりのしょうという絶対勝ちの人。どの役になるかというのは、もともとはくじ取りといって抽選をするんですが、この役だけはみんなの話し合いで決めるんです。この人は、要するに、乗尻の代表としてふさわしい、乗方も非常にうまい、それから紳士的で所作も上手、代表として出しても恥ずかしくないという人を、この美作国倭文庄の代表ですと。ただ、これがいつから、美作国倭文庄が何で一番になるのか、代表なのかというのは、わからないんです。神社のあらゆる記録を調べてもそんなことは書いてない。

<河村晴久氏>

いつからそうなっているのかというのも、わからないですか。

<堀川潤氏>

わからないですけど、多分、競馬を移された時からそんな話になっているんだと思うんですけど。実は1400年代に1回神社も燃えているんです。（その時に）大分古い文書がなくなっているんです。ということもあって、その頃に書かれたものがあつたのかどうかはわかりませんが、それは残ってないです。でも残っているものもあって、（例えば）現在の宮司は第204代。

<河村晴久氏>

204代、すごい数ですね。

<堀川潤氏>

204代の宮司なんです。それで、この何代というのが、200代の時は誰で150代の時は誰で、というのが全部わかっているんです。それは、私たちの祖先が、もともとお祭りをしていた時からずっと付けられている記録があるんですね。その記録によって全部残っていて、だからそれで204代というのがいまだにわかる。

<河村晴久氏>

皇室より代数が多いんですね。

<堀川潤氏>

すごいですよね。その神社の歴史のことを、ここで少し話が戻ってしまいましたが、十数年前に上賀茂神社の調査をされて、文書を全部調べられたんです。その時に、14000点余りの文書（が見つかり）、（実際は）もっとたくさん（あるかと思いますが）、今それらの文書が重要文化財になっているんです。一括ですよ。その中には、先ほど言いましたいろんな重要な人が見に来ていますということが書かれている。織田信長が書かれた直筆の文書が14通あります。秀吉が出された文書とか、それから家康の文書とかもあるんですが、秀吉はご承知の通りあまり字が書けなかったんですね。書けなかつ

たんですけど、直筆の文書があるんです。他にも、関ヶ原の戦いがあった 10 日後に、家康は「上賀茂神社に対して、これから私が天下を治めるんだから、この神社に対して狼藉を謀ってはならない」という、禁制という文書を出しているんです。関ヶ原の 10 日後ですよ。

<河村晴久氏>

10 日後ですか。

<堀川潤氏>

明智光秀も本能寺の変の 5 日後に、「私が天下を取りました」という文書を出してるんです。残っています。すごい文書があるんですが、そういう文書があるのに、先ほど言いました、なぜ陰陽道が残っていたり、20 頭の馬の庄園の一番が美作国倭文庄なのかというのが、これはわからない。不思議なんです。こういうお祓いをしたりとか、こういうお鞭洗いをしたりとか、いろんな儀式をするんです。実際にはこの一ノ鳥居から二ノ鳥居に向かって、こういう埒^{らう}を作って走るわけですけど、本当にわからないことだらけでございます。

組み合わせを決める時には、一頭一頭が走る素駄けというのを行い、その所作を見て決めていくわけです。それで、この（庄園の）役割を決めるのですが、先ほど言いました、この競馬の組み合わせを決める時も、何でこの役の人がこの庄園のことを今でもずっと名乗るのか。庄園制度は鎌倉時代に終わっているのに、いまだにこの庄園の名前を言うんです。自分の名前も言うのですが、（〇〇の）庄園の代表ですということをいまだに言うんです。それで、この美作国倭文庄がなぜか一番なんです。これはわからないです。

実は先ほど、河村先生と少しお話をしている中で、お能の世界でも、昔からのことをそのまま伝えてそのまま行うのだと先生が仰られて、実は我々も賀茂競馬を行う時に、儀式次第というのに基づいて全て行うのですが、この儀式次第の基は、鎌倉時代に書かれたものが、もともとなんです。それを基にしてずっと続けてきているんです。その教本みたいなものを実は現代語訳にした、こういうものがあって、ここに全部、順番などのことが書かれているんです。それをもとにして、みんながこれを読み合わせながら、行うんですけど、この中に何回も「例年通り」という言葉が出てくるんです。それで「これはどうしますか」ということを、先ほどのこの（画面左側の）人が聞くんですね。「いかがいたしますか」と。他にも、この祭を運営する催方という人がいるんですが、「いかがしますか」と皆に聞いたら、「例年通り」。例えば、「身体祓の儀はいかがいたしますか」「倭文からずで行いましょうや、それとも銘々でなさいますか」と言ったら、みんなが一斉に「例年通り」と。（要するに）「変えませんか、今まで通りやってください。」と。そのほか、5 日の装束をこの 1 日の日に、この儀式が終わってから貰うのですが、「装束揚の儀はいかがいたしましうや」と聞くんです。そうしたらみんな、「例年通り」と。だから「もう変えませんか、前と同じことをやりますよ」と言って、ずっと 1093 年間、続いているということなんです。

賀茂競馬の当日は 5 月 5 日です。先ほどの 5 月 1 日（の足汰式）がパートワン、これがパートツーで「菖蒲の根合わせ」です。先ほど言いました、女御が菖蒲を取り交わして（根の長さで）勝負を行い、左方チームが勝ったので左方がこの上賀茂神社に奉納したことの名残で、こういう菖蒲の根合わせというのをやるんです。今ここに写っているこのお社を「頓宮^{とんみやう}」といいまして、御本殿から分霊をおろしてくるんです。神降しという儀式をやりまして、それから菖蒲の根合せをやるんですが、これまた不思議なことに、神様が分霊でいらっしゃる屋根の上に、菖蒲を投げるんです。乗尻が菖蒲を投

げて、神様に「これから馬に乗ります」と言うんですが、これも不思議でしょう。

<河村晴久氏>

神様に向かってものを投げつけると。

<堀川潤氏>

そうなんです。それも屋根の上、いわば頭の上に菖蒲を投げるんです。

昔は京都でも、5月5日に端午の節句で菖蒲を屋根の上に投げませんでしたか。

<河村晴久氏>

菖蒲投げですね。その風習はここから来ているのですか。

<堀川潤氏>

そうでしょうね。ここの腰に挿しているのが、式鞭という式のときに使う鞭なんですね。この時には、5月1日の足汰式によって、左方チームと右方チームにもう分かれています。左方チームの人は、このように左の方に向けて鞭を挿し、右方の人は右の方に向けて鞭を挿します。それで、左大臣の方が（位が）上ですよ。だから左が優位なんで、左方チームの方が上位なんですね。

この左方と右方と、あらゆることがこの5日の日は違うんです。これは実際の、後ろに挿している鞭がこれなんです。式鞭という鞭なんですけど、今日ここに来られている方、ご覧になって、ねじり方が違うのがわかりますでしょうか。あとでここに置いておきますので見ていただいたらと思うんですけど、ねじり方が違うんです。先生見ていただいたらわかりますか。

<河村晴久氏>

はい。

<堀川潤氏>

このように、左方がやることと右方がやることが全く違うんです。それで、二つの団体戦ですから、これ（賀茂競馬）を行っていくんですけれど。

実際の競馬がパートスリーです。先ほどの菖蒲の根合わせは朝にします。この競馬は午後からします。皆さんは、実際馬が走っているのをご覧になるのは、この（資料の）後ろの方の、「一番の番より埒に入り、三遅、巴、小振の儀式」と書いてありますが、ここからなんです、ご覧になるのは。

<河村晴久氏>

私も拝見したことがあるんですけども、つまり（資料にある）この時間ですね。

<堀川潤氏>

午後2時頃です。ここの競馳というところを皆さんご覧になりますが、それまではほとんどご覧にならない。ぜひ時間がありましたら前を見てください。前の方が面白いです。

<河村晴久氏>

お祓いをして、実際はこんなに・・・

<堀川潤氏>

もういろんなことをするでしょう。ここに、（資料の）上から5つ目に「陰陽大夫祓の儀」とあると思うんですけど、先ほどの陰陽師が出てきて祓うんです。この儀式の時には、上賀茂神社の神職は全然関わらないです。

<河村晴久氏>

陰陽師だけでされるんですか。

<堀川潤氏>

祓うのは陰陽師だけです。宮司が来られるんですけど、宮司も祓われた時に頭を下げるんです。全然関わりません。

<河村晴久氏>

その陰陽師というのは、もともと朝廷の陰陽師がやってきてということですか。

<堀川潤氏>

そうですね。やってきたんですが、その役を上賀茂神社に移ってからは、賀茂県主が代わりにやっている。元々陰陽道をやっていました。こういう儀式をずっとやっているわけでございます。

これが5日の日の番立^{ばんだち}というか、番^{つがい}と言います。古式競馬は2頭で絶対走るんです。今はみなさん競馬と言ったら、たくさんの馬が同時に走るみたいに思われますけど、この形式になったのは1700年代の前半にロンドンで初めて始まったロイヤル競馬です。このたくさんで走るというのが西洋競馬の始まりで、古式競馬は元々2頭で走るようになっています。だから番を決めて、左方チームと右方チームで競争するんです。それで、全部庄園が書いていますけど、庄園の名前を言うんです。何で言うのかはわかりません。自分でも言っていて、自分がこの庄園の代表でもないのに、何で言うのかと思うんですけど、この名残がずっと残っていて、庄園の名前を言う。それを言って、勝負します。

この装束は、河村先生はご覧になったらわかるでしょう。いわゆる舞楽の装束を少しデフォルメしたといいますが、簡単にしたようなものです。赤い方が左方チームです。黒い方が右方。いわゆる左方が舞楽^{たぎゅうらく}の打毬^{こまぼこ}楽、右方は狛鉾^{こまぼこ}の装束を着ているんです。昔は勝ったら舞楽を舞ったそうです。

<河村晴久氏>

蘭陵王^{らんりやうおう}と納曾利^{なそり}を。

<堀川潤氏>

鎌倉時代まではそうです。そこから崩れていって、だんだんとみんな舞えなくなるんです。それで、（賀茂競馬が始まって）930年、来年なんですけど、復活して舞いますかと言われたんですけど、乗尻は絶対無理ですと。

独特の装束で、（資料の写真にある）こういうものをつけながら、行っていくわけでございます。全部陰陽道の関係があります。

先ほど言いましたように、一番は絶対（左方の美作国倭文庄が）勝って、（右方の加賀国）金津庄が負けるんです。前を追いかけて、俺は負けないぞと言って走るんですけど、この一番の番だけがバラバラで走るんです。あとは全部勝負する。

<河村晴久氏>

一緒に走るのですね。

<堀川潤氏>

もうガチンコで勝負をして、自分も乗っていた頃は、負けたら1年間腹が立つんです。走っているのは10秒ちょっとなんですけれど、何ヶ月もかけて練習してですね、毎年毎年いろんなことをして、例えば、潔斎をしますから、10日間ぐらいお肉も食わず、いざ本番になって10秒ほどのことで負けると腹立つんです。自分の技量が悪かったりするんですけど、2番以下は本当に真剣に走るんです。

それで次に、今日のお題にもあるんですけど、これ（伝統を）どうやって続けていくんだという話なんですけど、先ほど言いました賀茂県主、その末裔がずっと続けているんです。乗尻も全部そうなん

です。賀茂県主の系図に載っている人以外は乗れないんです。

先祖がちょうど明治5年までは書かれているんです。いわゆる国が、国家神道を行う以前までは全部書かれていて、神職は全て賀茂県主がやっていたんです。それが、我々は明治5年に追い出されて、(様々な行事が)できなくなるんですけども、競馬だけはずっと継承してきているんです。

実は神社には、この三大激震というのがありました。(一つが)応仁の乱。(次に)明治維新の太政官布告。要するに、神仏習合だったものが、寺は潰します、大きな神社は国が管理します、小さな神社はそれぞれの村で管理或いは合祀しなさいとか、いろんなことを行うんです。

神社の名前も変えられて、とりわけ有名なのが八坂神社ですよ。あそこはもともと祇園社という名前だった、だから(地名に)祇園という名前が残っているんです。それなのに、明治政府は「祇園社では駄目だ、八坂神社に名前変えろ」と言って、無理やり名前を変えさせたわけ。そういうことがあって、本当に神社にとって明治維新というのはとんでもない時代だったんです。だから大祓の祝詞など、祝詞も全部統一されてしまうんです。

しかし明治15年から、明治天皇が「やっぱり古い形を残さないといけない」ということで、勅祭社の春日大社、石清水八幡宮、それから上賀茂・下鴨の賀茂社。この三つだけは旧儀を遺そうという話になって、古い形を残しています。だから先ほど言いました、陰陽串にしろ、祝詞にしろ、上賀茂の祝詞はよその祝詞と違うんです。^{なかとみのほらえことば}中臣祓詞という祝詞があるんです。他の神社は全部、大祓という祝詞を読むのですが、祝詞が違うんですね。祝詞の中身も違いますし、古い形でやっていますので、祭式はすごく古いんです。今も、いくつかの祭りは一般の方も御本殿の前まで入って見ることができると。一般の方も入れるお祭りと入れないお祭りがあるのですが、一般の方でもお名前などを届出いただいて、幾らかお出しただかないといけないんですけども、そうすると参列することは可能です。今は神社の崇敬会というのがあって、それにお入りいただくとご覧いただけるんですが、先ほど言いました、片岡先祭ということもわかりますし、御扉を開いて中に神饌に入れられるのもわかりますし、すごく珍しいお祭りなので、せっかく北区にいらっしゃるので、一度はご参加されると面白いかなと思います。

それで、最後の宗教法が変わるといって、この三つが神社三大激震。賀茂県主三大激震でございます。

今はもう、競馬をやるにも、人もだんだん少子化で減って、それから、大学進学で東京に行ったら戻ってこない、或いは就職したら海外赴任もある、ということで人も足りません。馬もいません。今は競馬をする時に馬がないので、走る馬を愛知県から借りてきます。

<河村晴久氏>

愛知県からですか。また遠いところから。

<堀川潤氏>

皆さんはよく、いわゆる乗馬クラブからの馬ですかと言われるんですが、乗馬クラブの馬なんかをここに持ってきたら、覚醒しますから、ここで走るんだと思って覚醒してしまうと、乗馬クラブへ持って帰っても大変なことになります。普通の人に乗ってもバーっと走ってしまいますから、そんなことで1ヶ月間は走れなくなります。だから走れる馬を借りてくるんですね。馬がいません、環境も変わっています、ということで危機的状況です。

で、昔この社家町住んでましたと言いました。これ重要伝統的建造物群保存地区という難しい名前の。京都に5ヶ所ですかね祇園とかもそうですし。それから美山とかもそうですね。これ、外観とか

全然いじれないんですけど。これね、上賀茂神社とか明神川という川沿いにこういう町が、社家町ってありますけど。このお家って 400 坪ぐらいあるんです。昔は我々そこに住んでいて、神社に奉仕する時には、この川の、要するに自分ところにこの川の水の中にひき入れてありますから、それで潔斎してから出ていったんです。そういう潔斎場というのがちゃんとあったんですね。400 坪ぐらいの家があるんですが、現在住まれている社家の方は 2 人ぐらいしかいません。

だから、これをどうやって守っていくんやとかいうのは、我々がやっぱりこう継承するために育てていっていかないとはいけませんし、伝えていかないとはいけませんし。守れないんですけど、今までと同じように、例年通りでは守れないんで、やっぱり改革もしないといけないんですけど。これ、ねえ、先生も伝統芸能をずっとされてますけど。

<河村晴久氏>

結局その価値を知って、値打ちがわかって大切に思う心があればいいんですけど、現実難しいところですよ、それはこの社会情勢では。

<堀川潤氏>

で、これを 1000 年、これ今 930 年ですけど先に繋げていくためにはという。私なんかやっぱりさせていただくという奉仕の精神とかね、自分たちが守らんといかんという信念とかあるんですけど。それだけでは若い子にはなかなか通じないので。いわゆる先生のところのように、その家業としてされるわけじゃないんで、我々は。神社に奉仕する。

<河村晴久氏>

本当にご奉仕に上がるわけですよ。

<堀川潤氏>

そうなんです、職業じゃないんですよ。それをどうやってこう繋いでいくかということ、やっぱり親から子へ、一子相伝じゃないですけどちょっと伝えていかないとはいけません。なかなかこれ伝わらない。そうするとねやっぱり、これをつなげるために、官と民というか、行政もそうですし、それから一般の他の方々というか、これだけの価値を見出していく方々が一緒になってクラウドファンディングのような形とかで、お金もかかりますから守るということと、人をどう育成するかという、そこがね、一番の実は悩みどころなんです。

あと、その馬がないというのもね、どう育ててそれをこう持ってくるかという。本当はこれねサラブレッドの馬なんか全然合わないんですよ。

<河村晴久氏>

日本の昔の馬なんですよ、本来は。

<堀川潤氏>

昔の馬じゃないと馬具しても全然合わないです。と言うんですけど、もう嘆いているだけではあれなんで、活路開いていかないとはいけないなと。

で、来年その 930 年。1093 年からすると 930 年なので、何か記念行事やろうって言って、絵画コンクールをやろうとか、それから今ちょうど産大のところでは展示やらせていただいていますけど、その他に写真展やろうということで、町屋ギャラリーところも借りることにしました。それから、屏風のコラボ展示しようとか、記録映像をしようとか馬具を新調しようとか、いろんなことやろうとしています。J R 西日本さんが、ここには書いてないんですが協力していただいて、中吊り広告を無

料で出すっていうふうに言っていたいて、やっていただくというようなことももう決まりました。

こういう屏風が、実は 200 双ぐらい。

<河村晴久氏>

200 双、すごい。

<堀川潤氏>

賀茂競馬屏風。だからあの、日本の、ものすごい目玉の観光やったんですね昔は。それが今はちょっとねだいぶ廃れていますけども。60 双ぐらい残っているそうです。今でも。ここに書かれたようなところがお持ちになっていて、こういうところに、ぜひお願いですからこの時に、来年 930 年で屏風出してくださいよとお願いをして、出していただくということになりまして、ご協力いただけるそうでございます。というふうなことで、一応私の話はこれで終わりでございます。

<河村晴久氏>

はい、ありがとうございました。

<堀川潤氏>

めちゃくちゃ早足でバーッと行ってしまいましてすいません。で、一つだけ付け足しですが、先ほど、家康というか、親藩大名の 1 人だけ家来で（紋を）使った人がいますよという話。本田忠勝。

<河村晴久氏>

ああ、そうですか。

<堀川潤氏>

本田家は最後まで、葵の形は三つ葉葵じゃないですけど、立葵ですけど、最後まで紋は使うんです。家康が、お前は何でそれを使うんやって言うたら、何をおっしゃる、と。あなたは、要するに三河の国の賀茂神社の社家やったんでしょって。もっとまあ言えば、あなたは松平の紋を使えばいいじゃないですかと。私の先祖は、京都の賀茂社の神職をしていました。だから、この葵の紋は私は何を言われようと使います。と言ってずっと使ったそうです。だから本田家の紋は今でも立葵。

<河村晴久氏>

ひとつ能に賀茂がございますけれども、上賀茂さん、賀茂しませんですね。

<堀川潤氏>

あの、お能の賀茂ですね。上賀茂神社しないんです。なぜかという、あれ、ちょうど豊臣の時代ですよね、作られたの。

<河村晴久氏>

いやもうちょっと古い、金春禅竹ですので、応仁の乱の直前です。

<堀川潤氏>

あの話の中でね、神社の謂れの話しの中で。矢が流れてくるという、朱の丹塗りの矢が流れてくる話が。それを拾うのは、先ほど言いましたが上賀茂ではですね、上賀茂神社の御祭神のお母さんということですけど。あの話の中に出てくるのは違うんですよね。

<河村晴久氏>

秦氏の方が拾うことになっておりますね。

<堀川潤氏>

秦氏の娘が丹塗りの矢を拾うという話です。だから、秦氏の娘が拾うというのは違うでしょ、という事で。玉依日賣^{たまよりひめ}が拾って祀ったからできたんじゃないの。なのになんで秦氏の娘が拾って、賀茂社が生まれるんですか、賀茂別雷命なんですかという話しです。違いますよということで。

<河村晴久氏>

それで賀茂ではしないと。

<堀川潤氏>

賀茂では一切やらない。

<河村晴久氏>

ありがとうございます。一つ不思議が解けました。

<堀川潤氏>

すみませんなんかのあの上っ面の話ばかりだったかもしれない。

<河村晴久氏>

本当に今日はもう興味深い、知らない話をいっぱい伺うことができました。しかし、今最後危機とおっしゃったようにこの大切なお話…。

<堀川潤氏>

もっとおもしろい話はいろいろあるんですけど、今晚、一晚語っても足りないかもしれませんので、ちょっとこれぐらいにさせていただきます。また何かの機会に皆さん、機会がございましたらお話したいと思います。すいませんいろんな話をしまして、時代もあちこち飛んでしましまして失礼いたしました。ありがとうございました。

<河村晴久氏>

いや、本当貴重な話、こうしても今危機的状況とおっしゃるのは、これ本当これだけ伝わってきたものが、ここで途切れたら偉いことになるということですね。だから、今日お話伺いましたけれども、結局先ほど言ったように、価値が分かって、みんながこう値打ちがわかって伝えていこうという気にならないことには無理ですねこれ。

<堀川潤氏>

そうですね、やっぱり京都のね、三大祭りと言われているお祭り、それぞれのところご苦労なさってるところがあって。やっぱり知恵を出しながら、少しやっぱり形変えながらも伝えていこうと。何が重要かってやっぱり伝えていく、それを守るってことが一番重要なので。

<河村晴久氏>

いや、本当今日も伝えていただくいい機会になりました、本当にありがとうございました。

<堀川潤氏>

ありがとうございました。

<河村晴久氏>

ご聴講いただきどうもありがとうございました。これで今日は終わらせていただきます。